

# コミュニケーション能力を育てる

## ——総合的な学習の一環として——

村野光則

### 1. はじめに

今日、テクノロジーの急速な進歩により、生命倫理や環境倫理など、生命や地球環境全体に関わる倫理的課題が次々に私たちにつきつけられている。こうした課題に取り組む際に必要とされる能力は、周知を集め、より多くの人のコンセンサスが得られるようなルールや基準を紡ぎ出す能力である。

また、国際化する社会のなかでは、さまざまな文化（言語・宗教など）をもつ人たちとコミュニケーションしていかねばならない。その際必要なのは、言語だけに頼ろうとするのではなく、表情やしぐさなど非言語的なチャンネルも総動員してコミュニケーションしようとする姿勢である。

どちらの場合も、高いコミュニケーション能力が必要とされるが、そうしたコミュニケーション能力は自然に身につくものではない。このため、現代において、コミュニケーション能力の育成は学校教育において意図的に取り組むべき課題となっていると思われる。

### 2. 本校生徒の特徴

本校では、授業でレポートを課すと多くの生徒が優れた内容のレポートを作成する。数多くの文献を読み、インターネットで情報を検索し、専門家にインタビューし、数十枚に上るレポートを提出する生徒もいる。授業中発言の少ないクラスでも、授業の感想などを書かせるとぎっしりと書いてくる。書くことに対する抵抗感は少なく、書くことが好きな生徒が多いように思われる。ディベートの経験も豊富で、十分な準備の上で緻密な論理を展開することができる。さまざまな授業で、発表、スピーチなどが課されるため、人前で話すことにも慣れている。

一方で、発表の際、声が小さく表情が乏しい生徒も多い。ただ書いたものを読み上げるだけで、声が後ろの席まで届かない。そのため、内容的にはたいへん優れたものであっても、それがなかなか伝わってこない。発表の場面だけでなく、授業中の質問に対する答えが小さくてよく聞き取れない生徒も多い。声の小ささと表情の乏しさは、レポート発表やスピーチだけでなく、音楽の発表や音楽系サークルのステージにおいても同様である。そこには、「自分が真面目に発表（演奏）すれば、必ず相手は聞いてくれるはずだ」という漠然とした期待があるのではないかと思われる。

また、ディベートが得意な反面、与えられた課題をグループで知恵を出し合って解決したり、グルー

プでコンセンサスを形成していくことは不得手である。一方的に自分の意見を主張するメンバーに従ってしまったり、リーダーシップをとるものがないと、話し合いが進められず時間内に結論を出せないグループもある。こうした状況を見る限り、生徒たちのコミュニケーション能力は、文章力や論理的思考力に比べると十分に発達しているとはいいがたい。

### 3. なぜコミュニケーション能力が十分発達していないのか

子どもたちは学校内外のフォーマル、インフォーマルな集団の中で、相手や場面に応じたコミュニケーション能力を身につける。放課後、仲間同士で遊ぶことで人間関係を学び、「今日は何をして遊ぶか」「次は何をして遊ぶか」等、グループ決定の訓練を少しずつ積み、集団におけるコミュニケーション能力を伸ばしていく。しかし今日では、少子化の影響もあり、子どもたちだけで遊ぶ機会は少なくなった。毎日のようにおけいごとや塾があるため、一緒に遊ぶ友だちを見つけるには事前に電話でアポイントをとらなければならない。子どもを狙った犯罪が多発しているため、暗くなるまで遊んでいることもできなくなった。スポーツ少年団等が増加し、小さい頃から専門家の指導を受けられるようになった反面、自分たちで野球チームをつくったりすることは少なくなった。子どもの遊びはファミコンが中心となり、一人で家で遊ぶことも多い。友だち同士でいても、めいめいが自分のファミコンで遊んでいる光景もよく見かける。このように現代の子どもたちは、集団で問題を解決していく経験が少ないため、話し合いによって問題を解決していく能力が十分に伸ばせなくなっているのではないと思われる。

また、学校における人間関係の規模の縮小も、コミュニケーション能力の発達において大きな阻害要因になっていると思われる。学習指導要領からはずされたこともあり、学校教育におけるクラブ活動は衰退傾向にある。生徒たちの人間関係は、数人の仲良しグループが中心となっている。そして、携帯電話の普及と相まって、仲良しグループ内でのコミュニケーションが日常生活のコミュニケーションの大部分を占めるようになってきている。閉鎖されたグループ内のコミュニケーションは、メンバーだけに通じる語彙やコードを生み出し、一般的なコミュニケーションから乖離していく。仲良しグループ内の関係は深く密着したものになる反面、グループ外の人間との関係はより希薄なものとなっていく。このため、コミュニケーション能力が発達しにくい状況となっており、学校教育において、意識的に対人コミュニケーション能力を伸ばす努力をする必要があると思われる。

### 4. 育成すべきコミュニケーション能力は何か

コミュニケーションは、言語的コミュニケーション（発言内容・意味）と非言語的コミュニケーション（声の強弱、抑揚、表情、視線、身振り、対人距離など）に分類される。私たちは言葉がコミュニケーションの中心になっていると思いがちだが、コミュニケーションにおける発言内容（＝言葉）の比重は7%であり、顔の表情（55%）と声の調子（38%）が相手からのメッセージを解読する上で大きな

比重を占めている。私たちは、主に相手の表情や声の調子をたよりに相手の気持ちや言わんとすることを理解しているのである。

ところで、コミュニケーションは次のような構造をもっている。すなわち、送り手側は、伝達したい情報（知識や感情）を言語や身振りなどに記号化しメッセージを発する。受け手側は自分に送られてきたメッセージを解読し、そのメッセージを自分なりに理解する。こうしたコミュニケーション過程において必要なのは、自分の頭の中にある情報をうまく記号化できる能力（記号化能力）と、相手のメッセージを正確に解読できる能力（解読能力）である。同じ情報を伝達する場合でも、相手が年長者と子どもでは使用する語彙や話し方は異なる。相手が日本人である場合と外国人である場合では使用する言語が異なる。つまり、相手に通じやすい形に記号化できないと、自分が言わんとすることを正確に伝達することはできないのである。

一方、受け手側は、自分に送られてきたメッセージが英語で、自分が英語が不得意であれば、そのメッセージを正確に解読することができない。また、「怒っていない」と言いながらも大変険しい表情をしている場合、言葉のみにとらわれていると身体が発しているメッセージを見落としてしまう。言語だけでなく、非言語的なメッセージも解読できないと、相手の気持ちや言わんとすることを正確に理解することはできない。このためコミュニケーションにおいては、記号化能力と解読能力の両方を十分に伸ばす必要があるのである。

## 5. コミュニケーション能力を高めるための取り組み

授業では、記号化能力と解読能力を伸ばすことを目的として、(1)グループワークトレーニング、(2)手話、(3)1分間スピーチに取り組んだ。

### (1) グループワークトレーニング (GWT)

グループワークトレーニングは、チーム単位で活動することが多い企業において、チームの能力を最大限に引き出すために開発された新人研修用の教材である。近年では、小集団活動のノウハウを学ぶため、学校教育でも応用されている。

グループワークトレーニングでは、目的や人数に合わせてさまざまな教材が用意されている。今回活用したのは、一人では解決できない課題を与え、決められた時間内にメンバーで知恵を出し合ってグループとしての結論を出していくものである。その際、多数決ではなく、必ず全員のコンセンサスを得た上で結論を出すことが条件となっている。このため、メンバーは、自分の考えをできるだけ他のメンバーにわかりやすく説明しなければならず、言語的コミュニケーションにおける的確な記号化能力が要求される。また、他のメンバーに自分の考えを説明する際には、言葉だけで説明するよりも、身振り手振りをつけた方がより正確に伝わることに気づく。そして、話し合いの過程で、どのような身振り手振り、話し方が効果的かを他のメンバーから体験的に学ぶことができるのである。

なお、グループワークトレーニングを実施する際には、毎回必ず「ふりかえりシート」を提出させた。そして、その時間の自分の言動、他人の言動を意識化させ、そこで学んだことを一般化させることを心がけた。

#### [プログラム]

- ① 講義「GWTとは何か」 GWT「犯人は誰だ」（ふりかえりシート提出）
- ② GWT「びよびよ大学入学試験」（ふりかえりシート提出）
- ③ GWT「砂漠の選択」（ふりかえりシート提出）
- ④ GWT「冬山で遭難！さあどうする」（ふりかえりシート提出）
- ⑤ GWT「スペースレスキューHATO」
- ⑥ GWTのまとめ「リーダーシップとは何か、集団思考の問題点」

#### [評価の観点]

- ・「ふりかえりシート」を毎回提出しているか
- ・「ふりかえりシート」の各項目について、十分な考察がなされているか

## (2) 手 話

手話は、表情がとても大きなウェイトを占める言語である。表情をつくる際には20数種類の表情筋が関係している。表情筋も筋肉であるため、他の筋肉と同様、使わなければ退化してしまう。健聴者はコミュニケーションにおいて音声言語に依存する割合が高いため、ろう者に比べると表情筋が未発達である。そのため、手話を使ってコミュニケーションすることで、意識的に表情筋を使わせ、表情を豊かにすることをめざした。授業では、生徒には2つの会話課題を与え、それを二人一組で表現させた。

#### [プログラム]

- ① 講義「対人コミュニケーションの構造」
- ② 講義「非言語的コミュニケーションのいろいろ」
- ③ 指文字と自己紹介
- ④ 会話練習（実技テスト課題1）
- ⑤ 会話練習（実技テスト課題2）
- ⑥ ろう者による手話指導（講演「手話における表情の重要性について」＋実技テスト課題の指導）
- ⑦ 実技テスト1・2（二人一組で村野の前で表現する）

#### [評価の観点]

- ・プリントを見ずに会話できるか
- ・手話は適切か
- ・表情は豊かか
- ・相手をよく見ているか

### (3) 1分間スピーチ

1分間スピーチは、総合的なコミュニケーション能力の向上をめざすものである。スピーチの内容は何でもかまわない。自分で考えたものでも、小説や戯曲や新聞記事の一部分でもよい。重要なのは、いかに効果的に声を使うか、いかに効果的なしぐさを用いるか、である。また、どんなに優れた内容のスピーチであっても聞こえなければ意味がないので、会場の広さや相手との距離に適した声量を出すことも課題とした。

#### [プログラム]

- ① 課題を説明する
- ② いろいろな声を出してみる（高低、緩急、強弱、音色など）
- ③ 声を届ける（一人ずつ各列の前に立つ。生徒は全員、後ろを向いて座る。前に立った生徒は、村野が指示した生徒に向かって声をかける。座っている生徒は自分に呼びかけられたと思ったら手を挙げる。）
- ④ 1分間スピーチ（全員の前で行う。声の高低、強弱、緩急、間、音色などを記入した台本を提出させる。時間はタイマーで計り、1分を過ぎたら打ち切る。）

#### [評価の観点]

- ・台本を見ないで言えるか
- ・3種類以上の声（高低、速さ、大きさ、アクセント、音色）を使っているか
- ・効果的に間を取っているか
- ・3種類以上のしぐさ、身振りを入れているか
- ・豊かな表情で語っているか
- ・一番後ろまで声が届いているか
- ・できるだけ多くの人と視線を合わせようとしているか

## 6. おわりに～授業の反省と今後の課題～

コミュニケーション能力がどの程度向上したかを測る客観的な尺度がないため、授業の評価は主観的なものとならざるを得ない。その上で、授業結果を分析すると、次のようなことが言えるのではないかと思う。

- (1) グループワークトレーニングでは、提出されたふりかえりシートを読む限り、生徒たちは、集団での意志決定過程において、どのような説明のしかたが有効か、どのようなしぐさが効果的であるかを学ぶことができた。グループワークトレーニングでは、討議の結果が討議効率という数字になって表れるため一定の目安ができる。課題自体はとても楽しいものなので、生徒は楽しみながら学ぶことができたようである。今後は、教材の精選とより効果的な活用法を探っていきたい。
- (2) 手話の授業では、実技テストを収録したビデオを見る限り、多くの生徒が日常生活では見せない

ような多彩な表情を見せた。実際にろう者を招いて手話表現していただいたので、それが大変有益だった。生徒たちは、いかに自分たちが日頃表情筋を使っていないか、いかに音声言語に依存したコミュニケーションを行っているか、ということに気づいたようだった。手話に対する学習意欲は大変高かったので、生徒たちは楽しみながら手話を学ぶことができたようである。今後は、会話練習の種類を増やし、さらに表情筋を鍛え、より豊かで多彩な表情をつくれるようにしていきたい。

- (3) 1分間スピーチは、ビデオを見る限り、ほとんどの生徒が十分な声量で話せるようになった。声の表情も以前に比べて豊かになり、効果的にバトンサインや身振り手振りを用いることができるようになった。記号化能力が大幅に伸びたと感じられる生徒も多かった。

今回のスピーチでは、当初、「青年の主張コンクール」的な題材を想定していた。しかし実際には、物語や戯曲を使った「一人芝居」的なものが多かった。さまざまな登場人物の台詞があるため、声を変えやすかったためであろう。次年度はスピーチの題材を、「青年の主張コンクール」的なものに限定し、一人の声で多彩な表現ができるように指導していきたいと思う。

## 〔参考文献〕

- (1) 堀洋道他編『新編社会心理学』福村出版、1997
- (2) 末永俊郎他編『現代社会心理学』東京大学出版会、1998
- (3) 横浜市学校GWT研究会『学校グループワーク・トレーニング』遊戯社、1989
- (4) 横浜市学校GWT研究会『協力すれば何かが変わる―続・学校グループワーク・トレーニング』遊戯社、1994
- (5) 鴻上尚史『発声と身体のレッスン』白水社、2002
- (6) 成井豊『成井豊のワークショップ』演劇ぶっく社、2000